福祉の母に続け

（安仁屋 政 昭　あにや・まさあき）

1934 年 12 月 3 日生まれ　恩納村出身

沖縄国際大学名誉教授

日本科学者会議会員、歴史教育者協議会会員、沖縄平和ネットワーク代表世話人

主な著書に「島マスのがんばり人生」、「裁かれた沖縄戦」、「沖縄の無産運動」、「沖縄戦再体験」

論文に「沖縄における戦後補償の諸問題」など多数

島マス記念塾専任講師として、第 1 期から第 13 期まで「総論・島マス論」を担当

※役職等は、平成 19 年 1 月現在

島マスは 1900（明治 33）年、美里間切伊波村に生まれた。

1919 年、沖縄県女子師範学校を卒業して、中頭郡で小学校教員として 26 年間勤務。1921 年、島有剛と結婚。五男三女の母となる。戦後、コザ市を拠点に戦災母子世帯の救援や児童保護などの活動に従事し沖縄の社会福祉の基礎を築く。県功労賞をはじめ、「福祉の母」として各界から表彰される。

1988 年 7 月、88 歳の生涯を閉じた。

沖縄市社会福祉協議会では、「島マス塾」という学習塾を開いている。沖縄の全域から若者たちが馳せ参じ、島マスの福祉の仕事を通して、沖縄の福祉の歩みと現状と課題を知り、これを“わが誇りと使命”として引きついで行こうと真剣に学んでいる。

島マスは、戦後沖縄の福祉とともに歩んできた。敗戦の痛手と基地の矛盾の集中する沖縄にあって、身を挺して福祉の芽を育て、組織をつくり後継者を養成してきた。島マスの戦後史は、まさしく戦後沖縄の福祉の歴史を象徴している。

島マスの福祉の心は、貧困のなかで培われた。美里間切伊波村（石川市伊波）の小作人の末っ子に生まれ、苦学をして 1915 年に女子師範学校に進んだ。師範学校は官費の学校だが、全寮制であったから月に一円の舎費（寄宿舎の費用）は自己負担であっ

た。姉が、アダン葉帽子を編んで、その工賃で舎費を仕送りしたが、それも滞りがちであった。舎費を滞納すると退学処分になるのが例であった。マスは、この苦境をどのように切りぬけたか、次のように述懐している。「私はよく病気になりました。布団を頭からかぶって寝て一歩も出ないのです。舎費を納められないのですから、舎監の目をのがれるには病気になるしかなかったのです。二日も寝ていたら、舎監が校医をつれてきました。『あたまが痛いだけですから、お医者さんは結構です』と、ことわったのですが、舎監は心配になったのでしょう。私を診察した校医は、『この子は熱もないのだがな』と首をかしげています。この校医というのが、沖縄の結核予防と治療に力をつくした金城清松医師で、すいも甘いも、かみわけた人物でした」。島マスは、金城清松医師の志を生涯忘れることがなかった。1919年に師範学校を卒業して恩納村の山田尋常小学校に赴任し、二年後に母校の伊波の学校に移り、この年に島有剛と結婚した。その結婚式が例のないやりかただったという。「父の希望で、姉のカマドと私は、同じ日に結婚式をあげることになりました。物入りの結婚式を二度も続けてやることはできない、というのが父の言い分です。結婚の日、まず姉が挨拶をして嫁いでいきました。さすがの父も涙をおとしました。これを見ていた親戚の者が『お父さん！姉と妹いっしょでよかったね。二回泣くところを一回ですんで・・・』と、からかっていました」。＜貧乏神とのつきあい方＞が、実にたくみであったことがわかる。後年、島マスは貧窮にあえぐ若者を、こんなふうに励ましたものである。「貧乏人は四つの季節しか苦労しない。春、夏、秋、冬である。貧乏は恥ではない。しかし、名誉と思うな。金銭は無慈悲な主人だが、有益な召使にもなる」と。このユーモアの精神は、したたかである。相手を励まし勇気をあたえ、かつ自らもはげましたのである。また、「何も打つ手がないとき、一つだけ打つ手がある。それは勇気を持つことである」といって、笑いのなかで不屈の精神を訴えていた。なんだ、それは旧約聖書の言葉ではないかと苦笑する若者もいるが、島マスの場合は生活を通して体得した実感を淡々と述べただけである。上昇志向ではなく、貧しい者と共に歩む姿勢を指摘したのであろう。

大正末期から昭和初期は、ソテツ地獄といわれた不況と恐慌の時代であった。小学校を終えたばかりの十二、三歳の女の子たちが、紡績へ出稼ぎに出て行く姿に心を痛めた。港で娘を見送る母親たちは、「モウキティクーヨー、手紙ヤ後カラ銭カラドゥ先ドー（もうけておいで、手紙は後でよい、銭が先だよ）」と言ったという。女教師は、婦人会活動の指導者でもあった。島マスは、卒業したての二〇歳で恩納村婦人会長になった。村婦人会は、出征軍人の見送り、戦死者の葬儀への参列、軍人遺家族の慰問など、忠君愛国の精神をうえつける役割をになった。また、消費節約、風俗改良、冠婚葬祭の簡素化、衛生、火災防止などの運動の指導にもあたった。

島マスは伊波の学校から越来へ、さらに中城村の喜舎場の学校へと転勤し、この間に、五男三女の八人の子どもを生み育ててきた。「生めよ増やせよ」と国策でうたいながら、育児休暇などというものはなかった。働く女性は、「乳役兼用無角牛」といって、乳牛と役牛を兼ねたようなもので、牛との違いは角（つの）がないだけだというのであった。時代は激しく動き、十五年戦争のまっただなかにあり、婦人会の組織も国防婦人会、大日本婦人会と、戦時体制に組み込まれていった。必勝貯蓄奨励、衣料切符献納、廃品回収、国防訓練、勤労報国隊への参加など、地域の婦人会のリーダーとし

て、否応もなく銃後のまもりの先頭に立たされた。島マスは、この時代をふりかえって、「文字通り、イナグヤ　イクサヌ　サチバイ（女は戦さの先駆け）でした。この言葉の本当の意味は、生活をまもる女性のねばり強い働きをたたえるものであって、むしろ＜女は平和の先駆け＞というふうに私は考えるのですが、当時はなんでもかんでも戦争のスローガンにしてしまったのだと思います」と語っている。

島マスは、沖縄戦で二人の愛児を亡くしている。次女の邦子は一高女を卒業したばかりであったが、北飛行場建設の軍に事務員として徴用され、十・十空襲で十八歳の若い命を落とした。石部隊（六二師団）に入隊した長男の正隆を、天久の駐屯地に面会に行ったのが昭和20年の１月、再び会うことはなかった。いつ、どこで戦死したのかわからない。「私は、この悲しみを語ったことがありません。語ることができません。沖縄戦が終わって三三年たったときに、各地で三三回忌の供養が行われました。沖縄では三三回忌というのは、死者が共同体の守り神となるというので『ウワイスーコー』といって最終年忌であるわけです。しかし、沖縄戦の死者にかぎって『弔い上げ』はないと思います。子が親の三三回忌をやるというのなら分かります。どうして、親が子の三三回忌をやらなければならないのですか。納得できません」。＜行きしままとなりはてしかどわが胸に帰りきまさぬ一日とてなし＞という母親の心情は、語りつくせるものではないだろう。

沖縄戦のとき、島マス一家は羽地村に疎開した。北部戦線の戦火をさけて、ウフシッタイ（大湿帯）へ避難し、飢えとマラリアにおののきながら、山を越えて旧久志村の三原まで逃れてきた。避難民も地元民も、おしなべて食糧難のとき、島マス一家は地元の人々の助けによって無事に終戦を迎えることができた。島マスは、このときの気持ちを、「神に感謝する」という言い方であらわしている。1945年７月、山の中から瀬嵩に収容され、翌年の１月に石川に移動した。石川では、マスは大洋初等学校（宇座篤信校長）に勤め、夫の有剛は諮詢会の工務課で働き、戦後の生活がはじまった。1947年８月になって、越来村に越来村の城間盛善村長から「越来に来て婦人会長になってほしい」という伝言があり、一家は越来村に移ることになった。越来村は、すでに基地の街になっていて、米軍キャンプの周囲に住民居住地域ができていた。キャンプ・コザと呼ばれていた収容地区はどんどん広がっていき、1945年９月には「胡差市」となり、翌年４月には、もとの越来村にもどり、のちに住民がさらに増えて1956年７月には再び「コザ市」となるのである。島マスは、戦災母子世帯の救済を何よりも優先しなければならないと思っていた。教師を続けるか、婦人会長になるか、あれこれ悩んだが、30年間の教師生活をやめる決断をして越来村へ引っ越したのである。婦人会活動は、まず売春防止を訴え、母子世帯の救済と青少年の健全育成に力をつくすことにした。島マスは、越来村駐在の厚生員になった。これは米軍の指示であった。

戦災婦人や孤児や身寄りのない老人を救済するために、軍から救済物資が支給されていたが、救済を必要とする者の調査、救済基準や手続きなど、厚生員には煩雑な仕事があった。社会調査や社会診断を適切にやらせようとしたのである。厚生員は、戦前戦後を通じて初めての有給社会事業職員であり、のちの社会福祉主事の制度に発展していくのである。米軍からの放出物資のほかに、救援物資として、ララ（アジア救済連盟）から送られてくるもの、在米移民たちから送られてくる沖縄救援物資などがあった。医薬品、ビタミン、学用品、書籍、

玩具、靴、衣料、ミシン、漁具、山羊、豚、豚疫予防ワクチンなど多様であった。これらの救援物資は貧困者、孤児院、学校をはじめ、一般にも配られた。救援物資が公正に配られていないという苦情があり、厚生員は救済家庭を調査し記録することを義務づけられていた。島マスは「救済家庭」の調査とともに、「戦災母子世帯」の調査に精力をそそいだ。幼児と年寄りをかかえた婦人たちの姿は無残であった。米兵相手の売春が日常化していた。幼児を置いて「夜の働き」に出た家庭を訪ねては、島マスは悲痛な思いをした。＜いくさ世どでむぬ誰ゆ恨みゆが生し子むい育て肝に染みり＞と琉歌を書いて置いてきたこともあるという。

米兵が民家に入りこんで、女性に乱暴したという話は毎日のように伝えられた。人びとは自衛手段として、鐘を打ちならして身をまもった。この鐘は、米軍の火炎放射器の酸素ボンベや砲弾のヤッキョウであった。米兵は、この鐘で追いはらわれた。「誰がために鐘は鳴る」である。このような環境であるから、米兵相手に売春をする女性もふえた。戦災母子世帯の女性たちだけと思われがちだが、実態は必ずしも戦災未亡人たちだけではなく若い独身女性も多かったという。沖縄の社会が大きく頽廃していくさまが、島マスにはたえられなかった。「売春をやめろ」ということは簡単だが、この人たちに本当に自立できる仕事を与えてやるのが先決だと島マスは考えた。このために、八方に手をつくしてミシンや編み機を購入し、これらの婦人たちに転業をすすめたが、現実は安易な方向へ流れていった。特飲街の設置がその代表的な事例である。人権擁護、女性解放の立場から、特飲街の設置にまじめに反対する人びとは冷笑され、警察署長でさえ、「青少年の墜落・住民の危難防止の方策として、散在する売春婦を集め社会の安寧を保持する防壁たらしめよ」と演説したのである。島マスは「米軍の占領支配という現実が、私たちを押しつぶしていったのです。特飲街の設置を阻止できなかったことは、いつまでも心に残る悔いであります」と述べている。

1950 年代の初期、青少年の非行問題は深刻であった。基地周辺の子どもたちは、家庭でも学校でもほったらかしにされて街をうろつき、米軍基地に入って盗みを働くことなど平気だった。食糧を求めて犯罪にはしるケースが多く、女の子は基地周辺の飲食店やバーに出入りして転落していく場合が多かった。とくに、少女たちの売春については、心ない大人たちが少女たちを品物扱いしていた実態があった。島マスは無念であり怒りをおぼえた。米軍は 1947 年３月に、「婦女子の性的奴隷制の禁止」という布告を出しているが、こんな布告など誰も問題にもしなかった。

米軍基地に入って窃盗の疑いで捕まった子どもたちは、軍裁判にかけられ、刑務所へ送られた。米軍は、これらの少年たちを犯罪者として裁くことだけを考え、少年を保護し指導するという確認を持っていなかった。児童福祉法や少年法もない混乱の時代であった。青少年の人権と将来を守るために、島マスは厚生員として素手で軍裁判に立ち向かった。

島マスはコザの軍裁判に立ち合うためにコザ警察署に常駐し、特別弁護人として「アタマをフル回転させて」子どもたちの置かれている苦境を訴えた。軍裁判から釈放された子どもたちは、行くあてのない者が多かった。子どもたちを収容する施設はなかった。島マスは、この子どもたちを自分の家庭に引き取って面倒みた。「心の痛み」にたえかねて、そうするしかなかった。島マスの家族と周囲の人びとの悪戦苦闘が、ここから始まった。「私は、夫や自分の子どもたちにも、甥や姪たちにも、児童福祉に心

を寄せてくれた若い人たちにも、多大の犠牲をはらわすことになりました。みんな、チムグリサン（心が痛む）の精神で、児童福祉のために持てる力を発揮してくれたのでした」と、語っている。マス夫婦は、問題の児童たちを保護収容する施設として、一時保護所をつくることにした。土地を無償で提供してくれた中根光男さん、大宜味村塩屋から資材を運んで提供してくれた塩屋の人たち、マスの子どもたちも建築資金を貯金して提供し保護所の整地作業もひきうけてくれた。島マスは、わが子たちの励ましに感謝するとともに、この子たちの献身が周囲の人びとの心をも動かしてくれたのだと、二重の喜びにひたった。

児童保護所の建物はできても、衣類や食糧の確保、生活指導・学習など難題があった。人びとの助言と知恵によって、施設は「沖縄群島社会福祉協議会委託胡差児童保護所」として発足し、1952 年 11 月 25 日に開所式をおこなった。これより先、島マスは沖縄民政府職員に任命がえとなり、身分は「社会事業課事務官補」となっていた。1951 年３月には、沖縄群島政府から「児童福祉司」の資格を与えられ、琉球政府発足とともに、「社会福祉司」（のちの社会福祉主事）の資格を与えられていた。

胡差児童保護所は、児童保護の法も整備されていない時代に、民間人の独自の力で施設をつくり運営してきたものであることを記録にとどめておく必要がある。みずから耕し、タネをまき、収穫するという苦難の時代であった。

首里に厚生園ができ、沖縄職業学校（いまの沖縄実務学園）ができても、女子の教護施設はなかった。胡差児童保護所は、単なる一時保育所ではなく、女子教護院の役割をも負わなければならなかった。島マスは、現状を詳細に記録して琉球政府へ運営費の補助を訴えたが、要領を得なかった。「役人の口ぐせの＜善処する＞とか＜前向きに検討する＞ということばは、あまりあてにはなりません。しばらく待ってくれと言われても、目の前の事態は深刻になるばかりです」と、状況を語っている。島マス夫婦は、親戚や友人知人の助けを得て、女子教護施設「コザ女子ホーム」を完成させた。これには、地域の人びとの協力が大きかった。青年会の中根章さんをはじめ、商店街の人たちの支援は、その後の施設の運営に多大の力となった。女子ホームは、1954 年３月になってはじめて、琉球政府の責任で専任職員一人を配置することになり、島マスは女子ホームの専任職員となった。

このように、島マスは家族ぐるみで福祉の基礎をつくり、法の整備を訴え、若い世代をきたえてきた。1957 年からは、中部地区社会福祉協議会の事務局長として、市町村社会福祉協議会の育成に全力をそそいできた。なかでも、中部地区社会福祉事業研究を組織し、福祉の担い手を養成してきたことは特筆される。調査活動と研究討議を重視し、地域福祉の結束をかため、共通の認識を高めてきた。島マスは、若い福祉の仲間にむかって、つねづね「情熱と誠実さに加えて、科学的な調査と理論と冷静さも必要だよ」と語り、そして「常に現場への思い」を強調していた。「私は、強引とか、ヤナハーメーグァーなどと、いろいろ言われてきましたが、若い皆さんからニックネームをつけられるのは、むしろ誇りに思っています」と、シママースの面目躍如である。

この文は、安仁屋政昭氏が平成 6 年 11 月 28 日から 12 月 1 日までの 4 日間、琉球新報に「近代沖縄を生きた女性たち」というテーマのシリーズ連載に掲載したものです。